ヘロドトス

松平千秋 訳

世界古典文学全集

10

筑摩書房

908
Se22

書庫

ヘロドトス　　世界古典文学全集　第10巻

昭和42年7月20日初版第1刷発行

訳　者　松　平　千　秋

発行者　竹　之　内　静　雄

発行所　株式会社　筑　摩　書　房

東京都千代田区神田小川町 2—8
振替東京 4123 電話（291）7651

目次

歴史　松平千秋訳　5

巻一（クレイオの巻）　5
巻二（エウテルペの巻）　72
巻三（タレイアの巻）　126
巻四（メルポメネの巻）　177
巻五（テルプシコレの巻）　229
巻六（エラトの巻）　265
巻七（ポリュムニアの巻）　304

巻八（ウラニアの巻）　371
巻九（カッリオペの巻）　409
解説　松平千秋　445
度量衡表・索引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヘロドトス

歴史

巻一（クレイオの巻）

序　本書はハリカルナッソス[1]出身のヘロドトスが、人間界の出来事が時の移ろうとともに忘れ去られ、ギリシア人や異邦人（バルバロイ）の果した偉大な驚嘆すべき事蹟の数々――とりわけて両者がいかなる原因から戦いを交えるに至ったかの事情――も、やがて世の人に知られなくなるのを恐れて、自ら研究調査したところを書き述べたものである。

一　ペルシア側の学者の説では、争いの因を成したのはフェニキア人であったという。それによれば、フェニキア人はいわゆる「紅海[2]」からこちらの海に移ってきて、現在も彼らの住んでいる場所に定住するや、たちまち遠洋航海に乗り出し、エジプトやアッシリアの貨物を運んでは各地を廻ったが、アルゴスへも来たという。当時このアルゴスは、今日ヘラス（ギリシア）と呼ばれている地域にある国々の中では、あらゆる点で最も強大な国であった。さてフェニキア人はそのアルゴスに着くと、積荷を売りさばいたのだが、到着後五、六日目、商品も大方売り尽した頃、女たちが多勢海岸にやってきて、その中には王女も混っていた。王女の名は、ギリシアの所伝と同じく、イナコスの娘イオであったという。女たちは船尾のあたりに立って、それぞれ一番欲しいと思う品を買っていたが、このときフェニキア人は互いにしめし合すと女たちに襲いかかった。たいていの者は逃れたが、イオは他の幾人かの女たちとともに捕えられた。フェニキア人は女たちを船に乗せるとエジプト指して出帆していった、という。

二　ギリシア側の所伝とは違って、ペルシア人の言い伝えでは、以上のような次第でイオがエジプトへ行ったことになっており、これが最初のきっかけとなって、数々の暴挙が行なわれることになったのであるという。つまり、このことがあって後、名前は伝わらないが、なにがしかのギリシア人が、フェニキアのテュロスに侵入し、王の娘エウロペを掠め去ったというのである。このギリシア人というのは、クレタ人のことではなかったかと思うのだが、それはともかく、これでお互いさまということであったのに、その後こんどはギリシア人が第二の悪事を犯すことになったという。すなわち彼らは軍船に乗ってコルキス[3]地方のアイアに至り、パシス河に達し、目指す目的を果した後、王女メデイアをその地から奪い去った。コルキスの王はギリシアへ使者を遣わして王女掠奪の補償を求めるとともに、娘の返還を要求した。ところがギリシア側では、先方もアルゴスの王女イオ掠奪の補償を当方にしなかったのであるから、当方でも補償はしない、と返答したという。

三　その後次の世代に入ってから、プリアモスの子アレクサンドロス（パリス）が、右の話を聞き知って、ギリシア人も補償しなかったのだ

---

(1)　ハリカルナッソスは小アジア南部カリア地方の都市。なお写本は一致してハリカルナッソスの読みを採用しているが、Aristot. Rhet. iii 9 に引用された「トゥリオイ出身の」の読みを本来のものとする学者も少なくない。ヘロドトスがアテナイから南伊トゥリオイに移住した事実に基くものであろう（cf. Plut. Mor. 605）。

(2)　ここにいう「紅海」は今日慣用の語より広義で、紅海のみならずアラビア湾、ペルシア湾をも含む。「南の海」と呼ぶこともある。これに対して次の「こちらの海」は、いうまでもなく地中海を指す。

(3)　コルキスは黒海東岸の地方名。この事件はいうまでもなく、イアソンによる「アルゴー船遠征」の物語を指す。

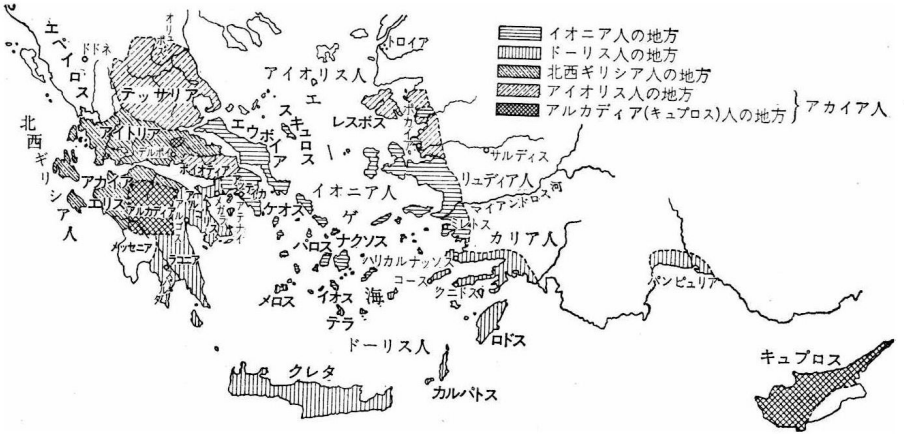
から、自分もせずにすむだろうと考えたからに相違ないが、ギリシアから自分の妻たるべき女を掠奪して来ようと思いたったのだと、ペルシア人は伝えている。こうしてアレクサンドロスがヘレネを奪い去った後、ギリシア側は先ず使者を送り、ヘレネの返還を求め、掠奪に対する賠償を請求することにした。しかしギリシア側の申し出に対して、アレクサンドロス側ではメデイア掠奪の先例を盾にして、ギリシア側が自分では補償も払わず、返還要求にも応じないでいながら、他からは補償を得ようとしている、と詰ったという。

四　ここまでは、お互いに掠奪をしたというに過ぎなかったのだが、これ以後はギリシア人の側に大いに罪があることとなったのだという。というのは自分らがヨーロッパに進攻するに先立って、ギリシア人がアジアへ軍を進めたからである。そもそも女を掠奪するというのは悪人の所業であるに相違ないが、女が掠奪されたことに対して本気になって報復しようとするなどというのは、愚か者のすることであり、掠われた女のことなどは全然顧みないのが賢明な態度であると彼らはいう。女の方にもその気がなければ、掠奪されるはずもないことは明白なことだからだというのである。ペルシア人の言い分では、アジア側は掠奪された女のことなどは問題にもしなかったのに、ギリシア人の方はスパルタ女の為に大軍を集め、アジアに進攻してプリアモスの国を亡してしまった。爾来ギリシアを自分らの敵であると考えているのだ、と。それというのも、ペルシア人はアジアとアジアに住む非ギリシア諸民族を自分に所属するものと見做しており、ヨーロッパとギリシアとは、それと別箇のものと考えているからである。

五　ペルシア人の伝えるところでは、事の経過は右のようであり、イリオス（トロイア）の攻略が因となって、彼らのギリシア人に対する敵意が生じたと見ている。一方イオについては、フェニキアの所伝はペルシアのそれと一致しない。つまりフェニキア人はイオを掠奪してエジプトに連れ去ったのではなく、イオはアルゴスで、例の船の船長と関係を結んでいたのだという。ところが女は、自分が妊娠したのを知ると、両親の手前を恥じ、自分のことが露顕せぬようにと自ら進んでフェニキア人と同船し出奔したのだという。以上がペルシア人とフェニキア人の伝えるところである。私はしかし、それらのことについて、その経過がそのとおりであったのか、あるいはそれとは違っていたのか、ということを論ずるつもりはない。私はただ、ギリシア人に対する悪業の口火を切った人物であることを私自身がよく知っている、その人物の名をここに挙げ、つづいて人間の住みなす国々（町々）について、その大小にかかわりなく逐一論述しつつ、話を進めてゆきたいと思う。というのも、かつて強大であった国の多くが、今や弱小となり、私の時代に強大であった国も、かつては弱小であったからである。されば人間の幸運が決して不動安定したものでない理（ことわり）を知る私は、大国も小国もひとしく取り上げて述べてゆきたいと思うのである。

六　クロイソスはリュディア人で、アリュアッテスの子として生れ、ハリュス河[1]以西の諸民族を独裁的に統治していた。ハリュス河とは、シリアとパプラゴニアとの間を南から流れてきて、北に向って、いわゆる黒海（エウクセイノス）に注ぐ河のことである。このクロイソスが、われわれの知る限りでは、ギリシア人をあるいは征服して朝貢を強い、あるいはこれと友好関係を結んだ、最初の異邦人であった。すなわち彼は、イオニア人、アイオリス人およびアジアに住むドーリス人を征服する一方、ラケダイモン（スパルタ）とは友好関係を結んだのであった。クロイソスの統治以前は、すべてのギリシア人が自由であった。クロイソスより以前にも、キンメリア人[3]がイオニアに侵攻したことがあったが、それも国々を征服するというようなことではなく、単に掠奪を目的とする侵入にすぎなかったからである。

七　ところで、ヘラクレス家の掌中にあった主権が、メルムナス家と呼ばれる、クロイソスの一門に移ったいきさつは次のとおりである。――カンダウレスという人物は、ギリシアではミュルシロスの名で呼ばれているが、ヘラクレスの子アルカイオスの後裔で、サルディスの独裁者であった。アルカイオスの子ベロスの子ニノスを父とするアグロンが、



紀元前800年頃のギリシア人の世界

ヘラクレス家の一統でサルディスの王となった最初の人物であるが、ミュルソスの子カンダウレスは、その最後の王であった。アグロン以前にこの国に君臨したのは、アテュスの子リュドスの子孫たちで、この国の住民たちを一括してリュディア人と呼ぶのは、リュドスの名にちなんだものである。彼らはそれ以前はマイオニア人と呼ばれていた。ヘラクレス家の一族は、神意に基き、このリュドスの後裔から委託されて主権を掌握したのであるが、彼らはイアルダノスという人物の使っていた奴隷女とヘラクレスとを祖とする家柄で、二十二代、五百五年間、父子その主権を相継いで君臨し、ミュルソスの子カンダウレスの代に至ったのである。

八　さて、このカンダウレスは、自分の妻を溺愛するあまり、妻がこの世のあらゆる女の中でもかけはなれて、絶世の美女であると信じていた。かく信じていたカンダウレスは、彼の近習の中で特に気に入りのダスキュロスの子ギュゲスという男がおり、彼には重要な事柄も打明けていたのだが、この男に妻の容色のことも大いに吹聴して聞かせていた。その後間もなくカンダウレスは、――所詮悲惨な目に遭うのが彼の宿命であったのであろうが――ギュゲスに向ってこんなことをいったのである。

「ギュゲスよ、お前はわしが妃の容色について話してやっても信じないようだが――いかさま人間は、眼ほどには耳を信用しないというからな

---

(1)　今日のキジル・イルマク河。

(2)　ここにシリア人（Μύροι）というのは、いわゆるシリア・パレスチナ地方の住民のことではなく、もっと北方のカッパドキア地方に住む民族のことである。

(3)　キンメリア人というのは北方クリミア附近にいたと推定される民族。なお一五、一六節を見よ。

(4)　「その後」というのは何を指すかよく判らない。結婚後ということであろうか、とはシュタインの推測である。

――、ひとつ妃が着物を脱いだところを見てみるがよい。」

ギュゲスは大声をあげていうに、

「殿様、私にとっては主君にあらせられるお妃様の素肌を見よとは、何と御分別のないお言葉でございましょう。女と申すものは、下着とともに、恥らいの心をも脱ぎ去るものでございます。私どもが則らねばならぬ名言の数々が、古人によって言われておりますが、その中の一つに、『己れのもののみを見よ』と申す言葉がございます。私はお妃様がこの世で最高の美女であらせられることを確信いたしております。されば、なにとぞ私に無法なことをお求め下さいませぬよう。」

九　ギュゲスは、かようなことから自分の身に災難のかかるのを怖れて、右のように言って王の申し出を拒もうとした。

すると、カンダウレスは次のように答えた。

「ギュゲスよ、案ずることはないぞ。わしがお前を試そうとして、かようなことを言ったのではないか、と恐れる必要もないし、また妃から何か咎を蒙りはせぬか、と気遣うことも要らぬ。妃がお前に見られても、絶対に気付かぬように、わしが手配しておこう。お前をわしらの寝室に入れ、開け立てた扉の後に潜ませてやろう。わしが入った後から、妃も寝室に来る。入口の傍に椅子があるが、妃は身につけたものを一つ一つ脱いで、その上に置く。それでお前は十分にゆっくりと眺めることができるわけだ。妃が椅子をはなれて寝台に向って歩み、お前に背を向けたならば、その時妃の目にとまらぬように気を付けて、扉の外に出るのだぞ。」

一〇　ギュゲスは拒みきれなかったので、覚悟をきめた。カンダウレスは就寝の時刻がきたと見ると、ギュゲスを寝所に連れ込み、妃もそれからすぐに入ってきた。そしてギュゲスは妃が部屋に入って、着物を置くさまを、眺めたのである。妃が寝台に向って歩き、彼に背を向けると、ギュゲスは隠れ場所から抜け出て室外へ去ろうとした。妃の目にはしかし、出てゆくギュゲスの姿が映ったのである。妃はそれが夫の仕業であることを悟ったが、恥を想って声も立てず、心の内にカンダウレスに対する復讐を思い定めて、気付かぬふりをしていた。それというのも、リュディア人のみならず、たいていの異邦人は、たとえ男でも裸身を他人に見られるのを、非常な恥辱と考えているからである。

一一　こうして妃は、この時は何も表面に顕わさず、おとなしくしていたが、夜が明けるや否や、自分に最も忠実であると考えていた家来たちに言い含めて身仕度をさせた上、ギュゲスを呼びよせた。ギュゲスは、妃が昨夜の顛末を何も知っていないつもりで、呼ばれるままに伺候した。それ以前も王妃から召されれば、伺候する慣いであったからである。ギュゲスがやってくると、妃は次のように言った。

「ギュゲスよ、そなたには今、進むべき道が二つあるが、そのいずれを採るかの選択は、そなたにまかせましょう。すなわちカンダウレスを殺して、私とリュディアの王国をわがものとするか、さもなくばそなたは、この場でただちに死なねばならぬ――今後もことごとくカンダウレスの言うがままになって、そなたの見てはならぬものを見るようなことのないようにじゃ。かようなことを企んだあの人か、私の肌を見て許されぬことを仕出かしたそなたか、いずれかが死なねばならぬ。」

ギュゲスはその言葉にしばし呆然としていたが、やがてそのような選択を無理強いして下されるな、と嘆願した。しかしその嘆願も通らず、主君を倒すか、自らが他人の手にかかって死ぬか、そのいずれかがまさしく逃れられぬ運命として迫っているのを見るや、自分が生きながらえる道の方を選んだのである。そして次のように訊ねて言った。

「私は気が進みませんが、お妃様は私にどうしても御主君を亡きものにせよと仰せられます故、お伺いいたしますが、どのような手段で殿様を襲ったものか、それをお聞かせ下さいませ。」

妃は答えていうに、

「あの人が私の肌をそなたにのぞかせた、その同じ場所から襲ったらよい。眠っている間にかかるのじゃ。」

一二　このような謀らみを打ち合せたのち、ギュゲスは、――今は放免もされず、また逃れる術もなく、自分が殺されるか、カンダウレスを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

討つかの瀬戸際に追いやられ――日の暮れるのを待って、妃に従って寝室に忍び込んだ。妃は彼に短剣を手渡し、前のときと同じ扉のうしろに潜ませた。それからカンダウレスが横になると、ギュゲスは抜け出して王を殺し、妃と王国とを二つながらわがものとしたのだが、このギュゲスの話は、同じ頃の人であるパロスの詩人アルキロコス[1]も、そのイアンボス六脚詩に歌っている。

一三　かくてギュゲスは王位を手中にしたが、さらにその地位はデルポイの神託によって、安固なものとなった。すなわち、リュディア国民がカンダウレスの横死に憤激して、武装蜂起したとき、ギュゲス一味の反乱者とその他のリュディア人との話し合いの結果、もし神託がギュゲスのリュディア王たることを認めたならば、ギュゲスが王となること、然らざるときは、ヘラクレス家に主権を返還すること、で意見の一致を見たのであった。しかるに神託はそれを認めたので、ギュゲスはかくて王位に就いたのである。ただし、デルポイの巫女（ピュティア）は、ギュゲスの五代目の後裔に至って、ヘラクレス家の報復が下る旨を附言したのであったが、リュディア国民もその歴代の王も、この託宣が実現するまでは、それを気にもとめなかったのである。

一四　このようにして、メルムナス家の一族は、ヘラクレス家から王位を奪い取ったのであるが、ギュゲスは王位に即いたのち、デルポイへおびただしい量の奉納物を献納した。実際デルポイにある銀製の奉納品のうち、きわめて多数のものがギュゲスの献納によるものであり、ギュゲスは銀製品のほかに、莫大な金製品をも奉納したが、中でも特筆すべきは、六個に上る黄金製混酒器である。これらの混酒器は、重量が三十タラントンもあり、「コリントス人の宝蔵[2]」に納められている。ただ実をいえば、この宝蔵はコリントスの国有ではなく、エエティオンの子キュプセロス個人に属するものである。このギュゲスは、われわれの知る限りでは、プリュギアの王であった、ゴルディアスの子ミダス以後、デルポイへ奉納品を献じた最初の異邦人である。というのは、ミダスもまた、彼が裁きをする時にいつも腰を掛けていた、一見に値するまことに見事な玉座を奉納したことがあったからである。この玉座は、ギュゲスの混酒器と同じ場所に納めてある。ギュゲスが奉納したこれらの金銀製の什器は、デルポイではその奉納者の名にちなんで、「ギュガダス（ギュゲスの宝の意）」と呼んでいる。

さてこのギュゲスも、王位に即いてから、ミレトスとスミュルナに軍を進め、コロポンの市街を占領するということがあったが、彼の在位三十八年の間、それ以外には大した事蹟もないので、彼については以上の記述にとどめて、終りたいと思う。

一五　ギュゲスの後王位に即いた、ギュゲスの子アルデュスについて述べよう。このアルデュスはプリエネを占領、ミレトスに侵攻したが、彼がサルディスを支配している時期に、キンメリア人がスキュティア系遊牧民の圧迫で定住地を追われて、アジアの地に入り込み、サルディスをそのアクロポリスを除いて占拠した。

一六　アルデュスの治世が四十九年に及んだのち、アルデュスの子サデュアッテスが王位を継承し、十二年間統治したが、サデュアッテスのあとをアリュアッテスが継いだ。このアリュアッテスは、デイオケスの子孫であるキュアクサレスおよびその指揮下のメディア人と戦い、キンメリア人をアジアから駆逐し、コロポンの植民都市であるスミュルナを占領し、クラゾメナイに侵攻した。ただしクラゾメナイでの作戦は思うにまかせず、散々な目に遭って撤退したのであった。このほかにもアリュアッテスは、その在位中に次のような大いに特記すべき業績を残している。

一七　すなわち彼はミレトスと戦ったのであるが、この戦いは父王から引き継いだものであった。彼がミレトスに軍を進め、これを攻囲した

---

(1) アルキロコスは前七世紀の高名な詩人。ただし「このギュゲスの話は……」の文は後世の挿入であるとして排除する学者も少なくない。

(2) ギリシアの有力な町はたいてい、奉納品を収める宝蔵をデルポイに建てていた。

遣り方は次のようであった。田畑に穀物が実る頃を見計らい、軍勢を敵の領内に進め、横笛（シュリンクス）、竪琴（ペクティス）、それに高音および低音の竪笛の調べに合せて進撃する。ミレトスの領土内に着くと、農地にある小屋は壊しも焼きもせず、戸も引き破らずに、みなそのままに置いておく。ただ果樹と田畑の穀物は散々に荒らしておいては、引き上げるのである。というのは、ミレトス人が海上を制圧しているので、陸軍による封鎖は効果がなかったからである。リュディア王が家を破壊せぬ策をとったのは、ミレトス人が再び種子蒔きをして耕作ができるように、その手懸りを残してやっておく意味で、相手に耕作させて、自分が侵攻して行ったときに荒らす材料にこと欠かぬように、という目論見からであった。

一八　このような作戦によって、彼は十一年間戦い続けたのであるが、この間ミレトス人は二回にわたって大損害を蒙った。一回は自国領のリメネイオン、もう一回はマイアンドロス河畔の平野における戦闘によってである。

この十一年の内、最初の六年間はアルデュスの子サデュアッテスがなおリュディアの王位に在り、この期間中ミレトスの地へ軍を進めたのも彼であった。そもそもこの戦争を始めたのがこの人物だったのである。この六年間に続く五年間は、サデュアッテスの子アリュアッテスが戦争を続けたのであるが、これは前にも言ったように、父親からこの戦争を受け継いだわけで、彼は非常な熱意をもってこれに当ったのであった。

イオニア諸都市の内、ひとりキオスを除いては、ミレトス人のこの戦争に援助しようとする都市は一つもなかった。キオス人は以前エリュトライアと戦った際、ミレトス人が加勢してくれたことに恩義を感じ、同じような行為によって報恩しようと、彼らを援助したのである。

一九　十二年目になって、侵入軍が穀物を焼却しようとしたことから、次のような事件が起った。すなわち穀物についた火は風に煽られ「アッセソス[1]のアテナ」と呼ばれるアテナの神殿に燃え移り、神殿が焼け落ちたのである。その時は誰も気にとめなかったのであるが、その後軍隊がサルディスに引上げた後、アリュアッテスが病いに罹った。ところがこの病気が長びいたので王は、誰かの建言によったのか、あるいは自分の判断で病いについては神様に使いを出して伺わせるのがよいと考えたのか、デルポイへ神託を伺う使者を送ったのである。デルポイに着いた使者たちに向ってデルポイの巫女（ピュティア）は、ミレトス地区のアッセソスでリュディア人が焼いたアテネの神殿を彼らが再建するまでは、神託を乞うてはやらぬといった。

二〇　以上は筆者がデルポイ人から聞いたことであるが、ミレトス人によれば、その上次のようなことがあったという。――キュプセロスの子ペリアンドロスは当時ミレトスの独裁者であったトラシュブロスときわめて懇意な間柄にあったが、アリュアッテスに下された託宣のことを聞き知るや、トラシュブロスに使いをやってそのことを伝えてやった。予め知っていれば臨機の措置がとれるであろうというわけである。ミレトス人の話はそのように伝えている。

二一　さてアリュアッテスはデルポイからの報告を聞くと、神殿再建に要する期間だけミレトス側と講和を結びたいと思い、早速使者をミレトスに送った。こうして使者はミレトスにいったのであるが、トラシュブロスには万事詳細な情報が入っており、アリュアッテスの出方も判っていたので、次のような策略をたてた。町中にある限りの食料――彼自身の貯えも市民達の手持ちも全部合せて広場（アゴラ）へ集めさせ、市民に布告して、自分が合図を出したら町中のものが一斉に、互いに招（よ）びつ招（よ）ばれつで大いに飲みかつ食えといったのである。

二二　トラシュブロスが布告を出してこんなことをやらせたのは、サルディスからの使者に山と積まれた食料と上機嫌で飲み食いしている市民の姿を見せ、それをアリュアッテスに報告させてやろう、という腹だったからである。

そしてそれがその思惑どおりになったのである。使者はその町の有様を見、リュディア王から言い付かったことをトラシュブロスに伝えてからサルディスに帰ったのであるが、私のきく限りでは、和平は正にこのことによって成立したのである。アリュアッテスは、ミレトスでは極度

の食料不足に悩み、人民は最悪の事態に追い込まれていると思っていたのであるが、ミレトスから帰還した使者の口から、予期していたのとは全く反対の報告を聞いたのであった。その後両者の間に、相互に友好および同盟の関係を結ぶという条件で和議が成立し、アリュアッテスはアッセソスに、アテネの神殿を一社ならず二社も建立し、病いも癒えたのであった。

アリュアッテスがミレトス人およびトラシュブロスを相手に戦った戦争の模様は以上のとおりである。

二三　ペリアンドロスはキュプセロスの息子で、トラシュブロスに例の託宣のことを報せたのはこの人物である。彼はコリントスの独裁者であったが、コリントス人のいうところでは――レスボス人もそれを認めているが――彼の在世中、世にも珍しい事件があった。メテュムナ（レスボス島の町）の人アリオンが、海豚に乗って海上をタイナロン岬（ペロポネソス南部中央の岬）まで運ばれたというのである。アリオンは当時彼に比肩するものなしとされた竪琴弾きの歌い手で、われわれの知る限りではディテュランボス[2]の創始者で命名者でもあり、コリントスでこれを上演もした人物である。

二四　コリントス人の話では、アリオンは多年ペリアンドロスの許にいたが、イタリアとシチリアへ渡る気を起し、渡航後かの地で多額の金を儲け、再びコリントスへ帰ろうとした。コリントス人をどこの人間よりも信用していたアリオンは、コリントス人の船を傭い、タラス（タレントゥム）から出航した。ところが海上に出てから、船員たちはアリオンを海に突き落して、金を奪おうと謀らんだ。これを悟ったアリオンは、金はやるから命は助けてくれ、と頼んだが船員たちは聞き入れず、陸地で埋葬して欲しければ自分で命を断て、さもなくばさっさと海へ飛び込めと強要した。脅迫によってぬきさしならぬ羽目に追いこまれたアリオンは、そのようにきまったことならば致し方ないが、せめて自分が演奏のときの完全な衣裳を着け、後甲板に立って歌うのを見逃してくれ、と頼んだ。歌い終ったらば自決すると約束したのである。船員たちは世界最高の歌手の歌を聞けるかと思うと嬉しくなって、船尾から船の中央へ移った。アリオンは完全な衣裳を着け竪琴を手にとると、後甲板に立って高い調子の祭礼歌[3]を一わたり歌い、歌が終るとともにその完全な扮装のまま海中に身を投じた。船はコリントスに向けて走り去り、アリオンの方は一頭の海豚が彼を拾い上げて、タイナロン岬に運んだという。陸に上ったアリオンは衣裳をつけたままコリントスへゆき、事の次第を残らず物語った。ペリアンドロスはその話を信ぜず、アリオンをどこへも出さず厳重に見張るとともに、船員たちの動向に注意していた。やがて彼らがコリントスへ来ると、ペリアンドロスは彼らを呼んで、アリオンがどうしているか知らないかと訊ねた。彼らが、アリオンはイタリアで無事でおり、タラスで別れるときも元気にしていたと答えた途端、アリオンが海中に飛び込んだ時と同じ姿で彼らの前に現われたのである。彼らは仰天し、証拠を突き付けられてはもはや犯行を否認することができなかった。

以上がコリントス人およびレスボス人の語るところで、タイナロン岬にはアリオンが奉納したという、海豚に人の跨った、余り大きくない青銅像がある。

二五　リュディア王アリュアッテスは、ミレトスに対する戦争を終えた後歿した。在位五十七年であった。病いが癒えたときデルポイに感謝

---

(1)　アッセソスはミレトス附近の小部落の名。

(2)　ディテュランボスはディオニュソス信仰と深い繋りをもつ合唱舞踊歌であるが、アリオンがその原始的形態から芸術的に洗煉発展させて、一つの独立した文学的ジャンルとして確立したというのであろう。

(3)　ここに「高い調子の祭礼歌」としたのは νόμος ὀρθιος の訳語である。ノモスというのは本来アポロンの祭礼に関係のある、ゆるやかで荘重な調子の歌謡であるが、νόμος ὀρθιος はここに訳したような意味なのか、あるいはむしろテルパンドロス（前七世紀中頃の詩人）の創始したと伝えられる特殊なリズムをもつ歌謡を指すのかよくは判らない。

の奉納をしたが、このようなことをしたのは一門では彼が二人目に当る。彼の奉納したのは巨大な銀の混酒器と、鉄を熔接して作った混酒器の台とである。後者はデルポイにあるすべての奉納物中でも逸品で、キオスの人グラウコスの作に成る。グラウコスは鉄の熔接の技術を発明した世界中でただ一人の男である。

二六　アリュアッテスの死後、その子クロイソスが三十五歳で王位を継いだ。クロイソスが攻撃の戈を向けた最初のギリシア都市はエペソスである。この時クロイソスによって包囲攻撃をうけたエペソス人は、アルテミスの神殿から城壁まで縄を張って、町全体をアルテミス女神に奉納したということにした。当時攻囲されていた旧城下[1]と神殿との距離は七スタディオンあった。クロイソスはエペソスに先ず手を染めたのであったが、ついでイオニア、アイオリスの全都市をさまざまな言い掛りをつけて攻撃した。重大な理由の見付かるときは、それをもち出すのであるが、時にはとるに足らぬ口実を盾にすることもあった。

二七　アジアのギリシア人が征服されて朝貢するようになると、今度は船を建造して島に触手を伸ばそうと考えた。造船の準備万端が整った頃のことである。一説によればプリエネの人ビアス[2]、別の説ではミュティレネの人ピッタコスがサルディスに来て、ギリシアで何かニュースはないかと訊ねたクロイソスに、次のような話をして彼の造船計画を止めさせたという。

「王よ、島の住民どもは、あなたに向ってサルディスに攻め込もうと、莫大な数の馬を買い集めておりますぞ。」

クロイソスは相手の話を真実だと思ってこういった。

「神様が島の住民どもに、リュディアを馬で攻めようという気を起させて下さるならば、まことに有難いことじゃ。」

すると相手が答えていうに、

「王よ、あなたは島の者どもが騎馬で侵攻して参ったならば、陸上で捕捉してやろうと意気込んでおいでのようにお見受けしました。まことにごもっともなこと。しかしながら、もしあなたが島を征伐なさるため船の建造を計画なさっておることを、島の者たちが知ったならば、誓ってリュディア軍を海上に捕捉し、あなたによって隷従させられております、大陸在住のギリシア人たちの報復を遂げよう、と念願するとはお考えになりませぬか。」

クロイソスはこの結論が大層気に入り、彼のいうのがもっともであると考えたので、その言を容れて船の建造を中止し、島に住むイオニア人たちと友好同盟を結んだのであった。

二八　その後しばらくの間に、ハリュス河以西の住民はほとんど全部クロイソスに征服された。すなわちキリキア人とリュキア人とを除き他のすべての民族を、クロイソスは自分の支配下に制圧したのである。これらの諸族とは、リュディア人、プリュギア人、ミュシア人、マリアンデュノイ人、カリュベス人、パプラゴニア人、トラキア系のテュノイ人とビテュニア人、カリア人、イオニア人、ドーリス人、アイオリス人、パンピュリア人である。

二九　これらの諸民族がクロイソスによって征服されリュディアに併合された後、殷賑の頂点に達したサルディスへは、当時世にあったギリシアの賢者がことごとく、かわるがわる訪ねてきたが、名に負うアテナイの人ソロンもその一人であった。ソロンはアテナイ市民の要望に応えて法律を制定したのち、諸国見物という口実の下に、十年間の予定で外遊の途についたのであった。しかし本当の理由は自分が制定した法律を一つでも廃棄せねばならぬような羽目に陥ることを避けるためであった。アテナイ市民自身は、ソロンが制定した法律は十年間守るという堅い誓約をした手前、法律を廃棄することはできなかったからである。

三〇　さてこうした事情もあり、また見物の目的もあって国を離れたソロンは、エジプトのアマシス王を訪ね、さらにサルディスのクロイソスの許にも姿を現わした。王宮でクロイソスから歓待を受けたが、到着後三日目か四日目かに、クロイソスの命をうけた家来が宝物蔵を案内し、豪華な財宝をことごとく彼に見せた。ソロンがそれらのすべてを見物し、心ゆくまで眺め終った頃を見計らい、王は彼にこう訊ねた。

「アテナイの客人よ、そなたの噂はこの国へも雷のごとく響いておる。そなたの賢者であることは素より、知識を求めて広く世界を見物して廻られた漫遊のことも聞き及んでおる。そこでぜひそなたにお訊ねしたいと思ったのだが、そなたはこの世界で誰か一番仕合せな人間に遭われたかどうかじゃ。」

クロイソスは自分が世界中で最も仕合せな人間であるつもりでそう訊ねたのであったが、ソロンは王に露も諛うようなことはなく、自分の真実と信ずるがままに答えていった。

「王よ、アテナイのテッロスがさようであろうと存じます。」

意外の答えに驚いたクロイソスは、意気込んだ口調で訊ねていうに、

「そなたは一体どういう点で、そのテッロスなる者が最も仕合せな人間だと考えられるか。」

ソロンがいうに、

「テッロスは先ず第一に、繁栄した国に生れてすぐれた良い子供に恵まれ、その子らにまた皆子供が生れ、それが一人も欠けずにおりました。さらに我国の標準からすれば生活も裕福でございましたが、その死際がまた実に見事なものでございました。すなわちアテナイが隣国とエレウシスで戦いました折、テッロスは味方の救援に赴き、敵を敗走せしめた後、見事な戦死を遂げたのでございます。アテナイは国費をもって彼をその戦歿の地に埋葬し、大いにその名誉を顕彰したのでございます。」

三一　ソロンがこのように、テッロスの仕合せであった所以を縷々として説いたので、クロイソスはいよいよいきまき、自分が少なくとも二位には必ずなれると考えて、テッロスに次いで第二番に最も仕合せな者は誰と思うか、と訊ねた。ソロンがいうに、

「それはクレオビスとビトンの兄弟でございましょう。二人はアルゴスの生れで、生活も不自由せず、その上体力に大層恵まれておりました。二人ともに体育競技に優勝しており、さらに次のような話が伝わっております。

アルゴスでヘラ女神の祭礼のあった折のこと、彼らの母親をどうしても牛車で社まで連れてゆかねばならぬことになりました。ところが牛が畑に出ていて時間に間に合いません。時間に迫われ、二人の青年が牛代りに軛に就いて車を曳き、母を載せて四十五スタディオンを走破して社へ着いたのでございます。祭礼に集まった群衆の環視の中でこの仕事を成し終えた兄弟は実に見事な大往生を遂げたのでございます。神様はこの実例をもって、人間にとっては生よりもむしろ死が願わしいものであることをはっきりとお示しになったのでございました。

すなわち、アルゴス人たちは彼らを囲んで、男たちは若者の体力を讃えますし、女たちは二人の母親に、何という良い息子を持たれたことかと祝福いたしました。母親は息子たちの奉仕と、二人の良い評判とをいたく喜んで、御神像の前に立って、かくも自分の名誉を揚げてくれた息子のクレオビスとビトンに、人間として得られる最善のものを与え給え、と女神に祈ったのでございます。この祈りの後、犠牲と饗宴の行事があり、若者は社の中で眠ったのでありますが、再び起き上ることはありませんでした。これが二人の最期だったのでございます。アルゴス人は二人を世にも優れた人物だとしてその立像を作らせ、デルポイへ奉納いたしたのでございます。」

三二　ソロンはこのように幸福の第二位を右の兄弟に与えたのであるが、クロイソスは苛立っていった。

「アテナイの客人よ、そなたが私をそのような庶民の者どもにも及ばぬとしたところを見ると、そなたは私のこの幸福は何の価値もないと、思われるのか。」

ソロンが答えていうのに、

---

(1) 旧城下というのは、カユストロス河南方の丘陵斜面にあった。（ロドトスの時代以後は、平地に新しい市街が開けたのである（ルグランの注による）。

(2) ピアスも次のピッタコスもともに、ギリシアの七賢人に数えられる人物である。

「クロイソス王よ、あなたは私に人間の運命ということについてお訊ねでございますが、私は神と申すものが嫉み深く、人間を困らすことのお好きなのをよく承知いたしております。人間は長い期間の間には、いろいろと見たくないものでも見ねばならず、遭いたくないことにも遭わねばなりません。人間の一生をかりに七十年といたしましょう。七十年を日に直せば、閏月はないものとしても二万五千二百日になります。もし四季の推移を暦に合せるために、一年おきに一ヵ月だけ長めるといたしますと、七十年間に三十五ヵ月の閏月が入ることとなり、これを日に直せば千五百日となります。さてこの七十年間の合計二万六千二百五十日の内、一日として全く同じ事が起るということはございません。さればクロイソス王よ、人間の生涯はすべてこれ偶然なのでございます。

あなたが莫大な富をお持ちになり、多数の民を統べる王であられることは、私にもよく判っております。しかしながら今お訊ねのことについては、あなたが結構な御生涯を終えられたことを承知いたすまでは、私としましてはまだ何も申し上げられません。どれほど富裕な者であろうとも、万事結構ずくめで一生を終える運に恵まれませぬ限り、その日暮しの者より幸福であるとは決して申せません。腐るほど金があっても不幸な者も沢山おれば、富はなくとも良き運に恵まれる者もまた沢山おります。きわめて富裕ではあるが不幸であるという人間は、幸運な者に比べてただ二つの利点をもつに過ぎませんが、幸運な者は不幸な金持よりも多くの点で恵まれております。なるほど一方は欲望を充足したり、ふりかかった大きな災厄に耐える点では、他方より有力ではございましょう。しかし幸運な者には他方にない次のような利点がございます。なるほど欲望を満足させたり、災厄に耐える点では金持と同じ力はございますまい。しかし運が良ければ、そういう事は防げるわけでございます。身体に欠陥もなく、病いを知らず、不幸な目にも遭わず、良い子に恵まれ、容姿も美しい、という訳でございますからね。その上更に良い往生が遂げられたならば、その者こそあなたの求めておいでになる人物、幸福な人間と呼ぶに値する人物でございます。人間死ぬまでは、幸運な人とは呼んでも幸福な人と申すのは差控えねばなりません。

人間の身としてすべてを具足することはできぬことでございます。国にいたしましても、必要とするすべてが足りているようなところは一国たりともございませぬ。あれはあるがこれはない、というのが実情で、一番沢山ある国が、最も良い国ということなのでございます。人間にいたしましても同じことで、一人一人の人間で完全に自足しているようなものはおりません。あれがあればこれがないと申すわけで、できるだけ事欠くものが少なくて過すことができ、その上結構な死に方のできた人、王よ、さような人こそ幸福の名をもって呼ばれて然るべき人間と私は考えるのでございます。いかなる事柄についても、それがどのようになってなったのか、その結末を見極めるのが肝心でございます。神様に幸福を垣間見させてもらった末、一転して奈落に突き落された人間はいくらでもいるのでございますから。」

三三　ソロンのこの話がクロイソスの気に添うはずはなく、現在ある福を捨て置いて、万物の結末を見よ、などという男は馬鹿者に違いないと思い込んだクロイソスは、一顧も与えずにソロンを立去らせたのであった。

三四　ソロンの去った後、クロイソスには恐ろしい神罰が降った。思うに彼が自分を世界一の幸福な人間であると考えたが故に降った神罰であった。すなわちその直後に彼は息子の身に起るべき災難を告げる夢を見、これが正夢となったのである。クロイソスには二人の息子があり、一人は聾唖の不具者であったが、もう一人の方は同じ年頃の者の中で何事にかけても飛び抜けて優れており、その名をアテュスといった。夢はクロイソスに、このアテュスが鉄の槍に刺されて死ぬことを告げたのであった。クロイソスは眼覚めた後、独り思案をめぐらしてみるに、その夢が恐ろしくてならなくなった。そこで息子に嫁を迎えてやることにし、これまではよくリュディア軍を率いて出陣していた息子を、それからは二度とそのような役目には出さぬようにするとともに、投槍、手槍をはじめ戦場で用いる武器の類はことごとく男部屋から女部屋に移して積み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com